優秀賞

安心できる居場所

宮城県 宮城県農業高等学校二年　庄子 怜未

歯車が狂い出したのは中学一年生の時の引っ越しでした。親友との別れ、慣れない学校、仲良くなれない友人により心に穴が空いた生活が始まったのです。教室にいることが苦痛でした。ある日を境に布団から出ることすらできず、不登校になったのです。

「どうして学校に行けないの？」、先生から何度も問われた言葉は、自分でも嫌という程理解していますが答えがでません。沈黙する私を憐れむ目は余計に惨めさを感じさせました。「今のままではダメだ」と言い聞かせ、制服に手を通しますが涙が止まりません。自分への不甲斐無さに怒りが湧いてきました。

「死んだほうがいい」。カミソリを手にして腕に押し当てますが、死ぬことへの恐怖に切り付けることができません。まるで出口の無い暗いトンネルを一人で彷徨う感覚でした。

希望を持てない中、母から「ほっとルーム」という場所が中学校にあると教えてもらいました。そこは不登校や教室に行けない生徒が通う場所です。不登校への焦燥感を払拭したい私は一度だけ通学してみました。入ると数名の生徒が本を読んだり、パズルをしたり、それぞれが違うことをしています。先生から、

「ここは自由に何をしてもいい。」

と言われました。先生は私を「不登校の生徒」ではなく、他の生徒と同じように見てくれました。不登校になってから憐れむ周りの目に恐怖を抱いていたことに気が付きました。引っ越して以来、失っていた居場所を見つけ、少しずつ学校に通えるようになっていたのです。気付けば半年という月日を不登校として過ごしていました。

「もし二ヶ月教室に行けたら高校を目指そう」と目標を持ち、三年生では教室で授業を受けられるまでに回復していたのです。自分で決めた目標だからこそ勉強に集中しました。なんと半年で合格ラインを上回ることができ、私は高校進学を成し遂げ、今では休むことなく通学しています。不登校を克服したことで自分に自信が持てるようになりました。

不登校の数は過去最高を更新しています。私と同じ様に苦しむ子がいると思うと、誰かを救えないかと考えるようになりました。春休みにほっとルームの恩師に相談すると、ほっとルームを広めて欲しいと想いを託されたのです。私は全ての学校にも同じような居場所をつくりたいと決意しました。

まずは高校の先生に相談しますが、

「学校には事情がある。余計なお世話だ。」

と言われましたが、諦めきれません。まずは、自分にできることから始めようと考え、生徒に楽しんでもらえる出前授業を企画しました。春休みに恩師に相談すると快く承諾してくれたのです。授業では、私が栽培したさつまいもを使用してスイートポテト作りを行いました。当日、中学生は外部から来た私に緊張して目を合わせてくれませんでしたが、私もほっとルーム出身であると伝えると少しずつ心を開いてくれました。一緒に調理をする中で会話が増えて、最後には、

「楽しかった。」

と笑顔で言ってくれたのです。不登校で生きることも諦めた私が、笑顔を生み出せたことに「やって良かった」と心から思えました。

小学生、中学生は人生経験が浅いからこそ、学校という小さなコミュニティが全ての世界です。だからこそ、不登校になると友人や先生が学校に行けない「ダメな人間」という烙印を押してしまいます。「この枠から外れ

ても大丈夫」と伝えることが大切です。不登校になることは、終わりではなく大きな成長を遂げるチャンスなのです。

ほっとルームは不登校への罪悪感で凍りついた生徒の心を溶かし、個性や可能性を伸ばせる場所です。他者から見れば不登校は失敗に見えるかもしれませんが、私にとっては成長に必要な挫折だったと言えます。死を選ぶほど苦しんだ私だからこそ、乗り越えた時、自分らしく生きる道を選択できたのです。生徒は教室でなくとも学び、成長することができます。だからこそ、不登校になる前に居場所を選択できることが学校には必要です。

これを広めるために、将来は大学へ進学し、教員免許を取得して教師になります。生徒の近くで寄り添い、成長を支えて見守る人になりたいのです。教師としてほっとルームというシステムを全国に広めて、苦しむ生徒を一人でも救うことが私の夢です。

現在も出前授業を継続して行い、先生や生徒に「そのままでも大丈夫」と伝え続けています。同時に不登校の実態を広め、流れが止まっている教育界に新しい風を吹かせます。世の中にとって小さな一歩でも私にとっては大きな一歩です。元不登校である私だからこそ、未来の子供達に寄り添いたいと思います。暗い闇もいつかは光が差し込むと信じてこれからも進み続けます。